

泪・なみだの八久和川

——八久和川遡行—— 1980年

幸 徳 伸 一

深い山々の間を縫う様に流れるその沢は、まだ遡行記録のないものや困難なものが多いと聞く。

朝日連峰の中北部を南北に流れる八久和川は、その源を三方境附近、御穴小屋の下部に発し、出合川、八久和川とその名称を変えて、遠く日本海へと注いでいる。また地区を見ると、この附近の沢は全て両岸が切り立ち、いわゆる廊下状になっており、滝マークがひんぱんに付いているのに気付く。80年の夏は、異常気象とも報せられる天候で、東北地方の梅雨明けは、8月の声を聞いても未だ発表されない始末であった。遡行メンバーは河崎をしくに水野、蓮木、幸徳、井上、佐々木、馬場の計7名、敢然と八久和川に挑んだのである。

＜本流遡行＞

7月21日、鶴岡で買い出しをした我々は、昼食を市内ですまして、いよいよ八久和川に入る。

前日までの、飯豊、朝日縦走の軽い疲労が残るなか、アプローチは、林道をタクシーで1時間ほど進んだが、土砂崩れの為に途中で降りなければならなかった。その日は、高安川出合まで8キロの地点から歩き始めた。夕日が山の端に沈む頃、八久和ダム湖畔にてテントを設営する。

翌22日の5時に朝食を摂り6時20分にダム湖畔を出発：猿倉沢、高安沢出合を過ぎて、8時過ぎにクチワル沢到着、コンクリートの橋がかかっており、ここまでは林道がまづまづ整っている為、釣り人のと思われる乗用車も停まっていた。クチ

ワル沢を過ぎると、道は急に悪くなり、ひどいブッシュをかき分けながら進む。しばしばヘビに驚かされながらもムカデ沢出合を通過、ここで、地下足袋を着用する。このところの降雨の為、水量の増加が予測されたが、実際、うす緑色に透き通った水が滔々と流れ、かなりの深さのよどみもある。

続いて左岸の踏み跡を辿どりハキダシ沢、フタマツ沢を過ぎて、約30分後、左岸から本流へ降りる。この時、水量は、膝程度で、両岸は、廊下状。

ちなみに八久和川遡行記録は、昭和25年の原全教氏以下4名と草刈三郎氏によるものがあるが、以後は、時々釣り人が通るくらいであり記録がない様である。本流をバシャバシャと派手な水音をたて、1時間ほど進んだところで、淵の為に進行不可能となり、右岸に逼り上がった。

踏み跡もないブッシュを苦労して14時15分、横沢を通過、左岸を30分ほど歩き再び本流へ戻る。

両岸の岩壁をトラバースを繰り返しながらベンノウ沢を横目に、今度は、右岸の岩壁を登攀し、藪の中を、見当をつけて歩いているうちに、カクネ通りと思われる跡を発見、付近の整備をして4時半にテントを設営、トラバースやブッシュの連続で、全員疲労困憊、普通の山行の数倍疲れた気がした。日没と共に、今度は、蚊の来襲に悩まされ、5時頃から降り始めた雨も激しさを増した。

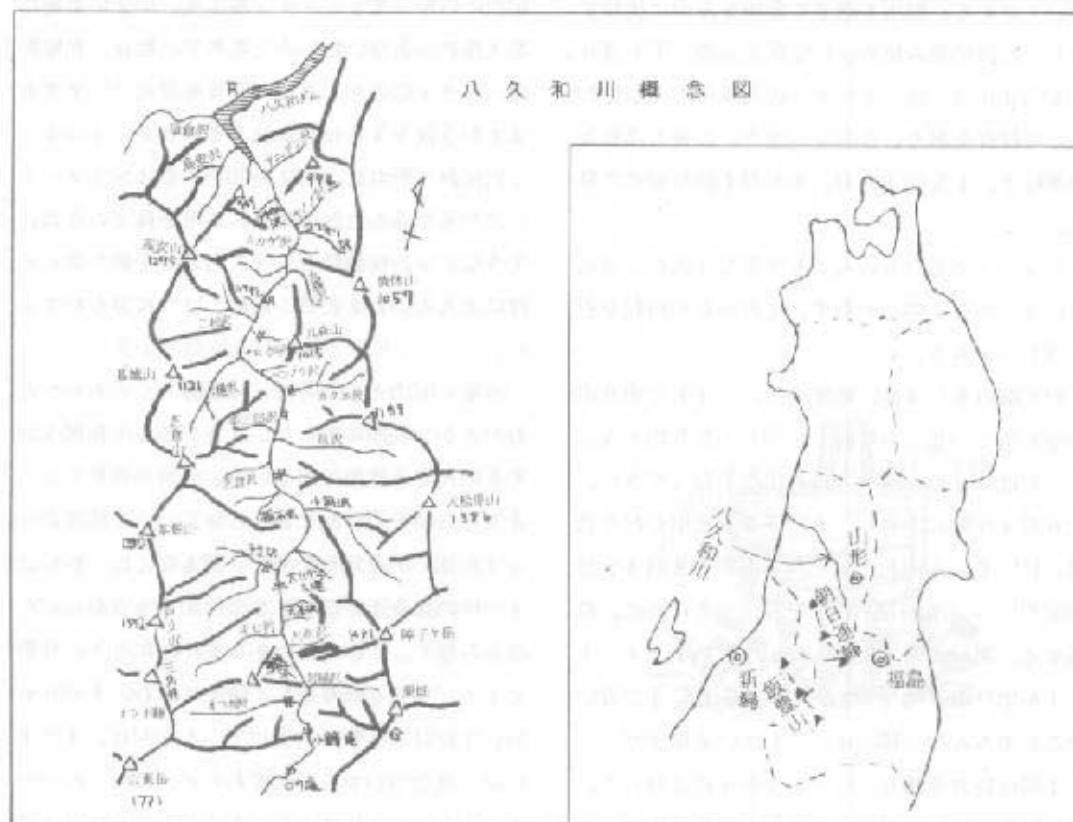
翌朝、4時半に起床した食当の私達は、雨の音を聞きながら朝食の準備を急ぐ。コンロの炎が勢い良く燃えるのを見つめながら、さきの飯豊・朝日の撤走から始まった合宿を振り返ってみる。

悩まされ続けた雨に天を恨んでも仕方あるまい。10時頃になって雨がやみ偵察を出す。ここがカクネ通りに間違いないだろう。軽い昼食をすますと、各自、岩魚釣りに行ったり、山菜取りに出かける。(さて今晚は、岩魚の塩焼きが喰えそうだ?) 川を見ると泥色に濁った水がダクダクと流れていて、以降の遡行に不安を覚えた。各人の努力も空しくこの日の獲物はゼロ、お決まりの夕食にフキが加わっただけであった。

次日、24日は、6時50分に出発、小雨の中を約50分でカクネ小屋跡に着いた。高い杉の木

が6本立ち並び、40平方メートルほどに切り開かれて、丸木が組まれている。昔は、このあたりも熊師の往来があったらしい。資料では、ここから本流へ降りることになっていたのに、偵察、ブッシュにつかまりながら本流へ下る。出発当時から雨がまだ降っている。水の冷たさが頭の先まで、凍みて、体が小刻みに震える。右岸に長沢、左岸に芝倉沢を見ながらトラバース、高巻き、泳ぐことの連続、長雨で水嵩が増し、例年よりも余計に進行が困難になっているようだ。11時に新で昼食を摂った後、左岸のブッシュに分け入る。各人のワラジの消耗がひどく、それぞれ5〜6足持参していたのが、残り少なくなる。11時40分、梶の木沢に出会い、再び本流右岸のトラバースを1時間ほど続けると小国沢に出た。ここからは、

八久和川概念図



岩のトラバースも不可能で、本流を泳ぐことも無理な様子である。仕方なく右岸を巻くことにしたが、難所が多くて、メンバーの1人が2メートル滑って手を捻挫、ことを過ぎるのに多くの時間を要す。しばらく行くと、左岸に河原が広がっていたので、全員徒渉——急流の為、川中で転倒する者、流されて喘いでいる者も居て、徒渉完了時は、大半がびしょ濡れ、テントを設営と同時に、焚火をしたが、ガソリンをかけても燃えない始末、夜半からまた雨……。

翌25日、6時40分出発。最初から右岸へ徒渉、朝一番は、特に寒さがこたえる。右岸の高巻きは、一向に距離が伸びず2時間たっても、まだテント場が見えている。8時半ごろから晴れ間が見え始めた。久々の太陽に回りの景色までもが輝やいて見える。難所を過ぎて急流を左岸に徒渉すると、好調に進み始め、戸立沢の大滝の下を通り、11時40分には、大ハダラの石滝に出くわした。ここで昼食を摂り、右岸を高巻き、以後も高巻きの連続で、15時30分、平七沢手前河原にて幕営。

シュラフにもぐり込んでも単調な水音が、耳についてなかなか寝つかれず、これからの行程を思い浮かべてみる。

目が醒めると4時、暗闇の中、ライトで朝食の用意をしているうちに回りが明るくなり始める。

今日は26日、残りの日も少なくなってきた。

6時45分に出発し、6時55分に平七沢を通過、続いて、大赤沢、明光沢を過ぎて8時45分岩屋沢についに到着。BCを設営するために、整地する。溯行当時、広がった川巾(約15メートル)が半分以下になっている。一応BCまで着いたことでみんな一様にホッとしている様子だ。11時に昼食を摂り、パーティを3班に分けて、八久和本流、ウツボ沢、岩屋沢の偵察に出発——

2時間後、各班が、BCに戻り情報交換した結果、大赤沢と岩屋沢を3名と4名のパーティで溯行することになった。夕食迄、各自釣をしたりスケッチをしたりしている。

27日の朝、目醒めると雨が強く降っている、仕方ない、今日も沈だ。昼頃になって雨も治まったが、所在なさにかまけて、無心で山を眺めていた。

目を閉じると耳ざわりのよい水音が、環りの静けさと調和して、みちのく独特の山の息吹を感じるのである。この山深い地では、人間という存在は、不協和音なのかもしれない——などと、とりとめもないことを考えながら、1日を過ごした。

＜岩屋沢溯行＞

28日は、小雨の中を6時15分、大赤沢、岩屋沢に向かって2パーティが出発、いよいよ溯行の大詰めが近づいた。(ところで、私は、岩屋沢のパーティの方だったので、岩屋沢について書きますが)我々4名は、本流を200メートル下って岩屋沢へ折れた。約1時間、川巾4～5メートルのだらだらした沢を登る。高度を稼ぐことは、できないが、快調なピッチで岩の上を跳びはねる様に進んでいたところ、沢は、2つに分かれていた。

水量、川巾とも両者は、ほぼ等しくどちらへ進むべきか、判断に苦しむ。5万分の1の地図をのぞき込んでも結論は出ないし、偵察の結果もはっきりしないので、勘に頼るしかない。上流に向かって右側の沢を登り始めた。間もなく出くわした1つ目の滝をよじ登り、2つ目の大きな滝は、左岸を高巻く。このあたりから流が急になり、登攀とトラバースを繰り返す、慎重に進む。8時30分、2回目の休憩、見上げていると沢は、まだまだ硬く根な気がする。相変わらず、くねくね曲がり小さな滝が連続する沢であるが、それほど困難

なく進んだ。八久和本流の廻行は、困難と苦闘の連続であったが、岩屑沢は、比較点検しやすい沢登りが出来た。約12~13メートルの滝を越す時、ザイルを伸ばした。ハーケンも使用、4人とも簡単に滝の上に立った。次の滝は、20メートル以上もあり、我々はワラジを締め直して、これに挑んだ。

ルートを定め岩に取り付いたが、苔が濡れて、ズルズル滑り、登攀不可能、少し左にかわし、再びトライ、滝の水が激しく落下しているすぐ横をびしょ濡れで、震えながら登る。岩も濡れていて、滑りやすい。鋭角的なホールドが多いのだが握り切れたワラジでは不安が残る。全員が登るのに30分以上かかり、滝の上で3回目のズッチを切る。時計を見るともう10時前をさしていた。

ここまで来ると沢は狭くなり、水量も少なくなってきた。10時に出発、兩岸の岩壁も、接近してきたので、両足を広げ、チムニーの登り方で、のり越し、トラバースで、高度を稼ぐ。ここでまた沢が2つに分岐、相談の結果、左の沢に決めた。

それから20分ぐらい進むと流れが途絶えて、クマ笹や剣木が茂っている。稜線が近いと思われたので、勇んでブッシュの中を突き進んだ。20分ほどで荷望の稜線の登山道に飛び出した。

———正に感激の一瞬……大赤沢のメンバーは、今どのあたりだろう。当初の目的の1つであった八久和川完全廻行は、上部に雪が残りすぎていて雪渓になっていたとと、悪天候の為、行程が伸びなかったことが祟った為に逃してしまい、残念だったが、8日間に渡る長い沢の廻行によって精神的にも肉体的にもメリッとは、大きく、我々に、貴重な体験を与えてくれた。

(24代)

参考文献『山と溪谷』昭和51年6月号

八久和川廻行は、1980年の夏合宿として、飯豊山系縦走の後引きについて行われたものである。

